

仙人

芥川龍之介

青空文庫

上

いつごろの話だか、わからない。北支那の市まちから市を渡つて歩
く野天のてんの見世物師に、李小二りしょうじと云う男があつた。鼠ねずみに芝居をさ
せるのを商売にしている男である。鼠を入れて置くふくろ囊が一つ、衣
装や仮面めんをしまつて置くはこ筥が一つ、それから、舞台の役をする小
さな屋台のような物が一つ——そのほかには、何も持つていない。
天氣がいいと、四つ辻の人通りの多い所に立つて、まず、その
屋台のような物を肩へのせる、それから、鼓板こばんを叩いて、人よせ
に、謡うたを唱う。物見高い街中の事だから、大人でも子供でも、そ

れを聞いて、足を止めない者はほとんどない。さて、まわりに人の墻かきが出来ると、李は囊の中から鼠を一匹出して、それに衣装を着せたり、仮面めんをかぶらせたりして、屋台の鬼門道きもんみちから、場へのぼ上らせてやる。鼠は慣れていると見えて、ちよこちよこ、舞台上を歩きながら、絹糸のように光沢つやのある尻尾を、二三季度ものしく動かして、ちよいと後あと足あしだけで立つて見せる。更紗さらさの衣裳の下から見える前足あしのうらの蹠あしがうす赤い。——この鼠が、これから雑劇ざっくの所いわゆる謂せつし楔子せつしを演じようと云う役者なのである。

すると、見物の方では、子供だと、始から手を拍って、面白がるが、大人は、容易に感心したような顔を見せない。むしろ、冷然として、煙管きせるを啣くわえたり、鼻毛をぬいたりしながら、莫迦ばかにし

たような眼で、舞台上の上に周旋する鼠の役者を眺めている。けれども、曲が進むのに従って、錦切れの衣裳をつけた正旦せいたんの鼠や、黒い仮面めんをかぶった浄じようの鼠が、続々、鬼門道から這い出して来るようになる、そうして、それが、飛んだり跳ねたりしながら、李うたの唱う曲やその間へはいる白はくにつれて、いろいろ所作しよさをするようになる、見物もさすがに冷淡を装っていらなくなる、追々まわりの人だかりの中から、※子そうしだい大などと云う声がかかり始める。すると、李小二も、いよいよ、あぶらがのつて、忙せわしく鼓板を叩きながら、巧たくみに一座の鼠を使いわける。そうして「沈こつこう黒に江しずむ明みん妃び青せい塚ちよう恨のうらみ、耐ゆうむ幽に夢たう孤こ雁がん漢かん宮き秋ゆう」
 とか何とか、題目だいもく正名せいめいを唱う頃になると、屋台の前へ出して

ある盆の中に、いつの間にか、銅銭の山が出来る。……

が、こう云う商売をして、口を糊のりしてゆくのは、決して容易なものではない。第一、十日と天氣が悪いと口が干上つてしまふ。

夏は、麦が熟す時分から、例の雨期へはいるので、小さな衣裳や仮面めんにも、知らないうちに黴かびがはえる。冬もまた、風が吹くやら、雪がふるやらするので、とかく、商売がすたり易い。そう云う時には、ほかに仕方もないから、うす暗い客舎はたごの片すみで、鼠を相手に退屈をまぎらせながら、いつもなら慌しい日の暮を、待ちかねるようにして、暮してしまふ。鼠すうの数は、皆で、五匹で、それに李の父の名と母の名と妻の名と、それから行方ゆくえの知れない二人の子の名とがつけてある。それが、囊ふくろの口から順々に這い出して

火の気のない部屋の中を、寒そうにおずおず歩いたり、履くつの先から膝の上へ、あぶない軽かるわぎ業わざをして這い上りながら、南豆玉なんきんだまのような黒い眼で、じつと、主人の顔を見つめたりすると、世故せこのつらさに馴れている李小二でも、さすがに時々は涙が出る。が、それは、文字通り時々で、どちらかと云えば、明日あすの暮しを考える屈託くつたくと、そう云う屈託を抑圧しようとする、あてどのない不愉快な感情とに心を奪われて、いじらしい鼠の姿も眼にはいらぬ事が多い。

その上、この頃は、年の加減と、体の具合が悪いのとで、余計、商売に身が入らない。節廻しの長い所を唱うと、息が切れる。喉も昔のようには、冴さえなくなつた。この分では、いつ、どんな事

が起らないとも限らない。——こう云う不安は、丁度、北支那の冬のように、このみじめな見世物師の心から、一切の日光と空気を遮断して、しまいには、人並に生きてゆこうと云う気さえ、未練未^{みしやく}釈なく枯らしてしまう。何故生きてゆくのは苦しいか、何故、苦しくとも、生きて行かなければならないか。勿論、李は一度もそう云う問題を考えて見た事がない。が、その苦しみを、不当だとは、思っている。そうして、その苦しみを与えるものを——それが何だか、李にはわからないが——無意識ながら憎んでいる。事によると、李が何にでも持っている、漠然とした反抗的な心もちが、この無意識の憎しみが、原因になっているのかも知れない。

しかし、そうは云うものの、李も、すべての東洋人のように、
 運命の前には、比較的屈従を意としていない。風雪ふうせつの一日を、
 客舎はたごの一室で、暮らす時に、彼は、よく空腹をかかえながら、五
 匹の鼠に向つて、こんな事を云つた。「辛抱しんぼうしろよ。己おれだつて、
 腹がへるのや、寒いのを辛抱しているのだからな。どうせ生きて
 いるからには、苦しいのはあたり前だと思え。それも、鼠よりは、
 いくら人間の方が、苦しいか知れないぞ……」

中

雪曇りの空が、いつの間にか、みぞれ霽まじりの雨をふらせて、狭い

往来を文字通り、脛はぎを没する泥濘でいねいに満そうとしている、ある寒い日の午後の事であった。李小二りしょうじは丁度、商売から帰る所で、例の通り、鼠を入れた囊ふくろを肩にかけながら、傘を忘れた悲しさに、ずぶぬれになって、市まちはずれの、人通りのない路を歩いて来る――と、路傍みちばたに、小さな廟びやうが見えた。折から、降りが、前よりもひどくなつて、肩をすぼめて歩いていると、鼻の先からは、滴しずくが垂れる。襟からは、水がはいる。途方に暮れていた際だから、李は、廟を見ると、慌てて、その軒下へかけこんだ。まず、顔の滴をはらう。それから、袖をしばる。やつと、人心地がついた所で頭の上の扁額へんがくを見ると、それには、山神廟さんじんびやうと云う三字があった。

入口の石段を、二三級のぼ上ると、扉が開いているので、中が見える。中は思ったよりも、まだ狭い。正面には、一尊いつそんの金甲山神が、蜘蛛くもの巣にとぎされながら、ぼんやり日の暮を待っている。その右には、判官はんがんが一体、これは、誰に悪戯いたずらをされたのだから首がない。左には、小鬼が一体、緑面朱髪で、そうどう 獐な顔をしているが、これも生憎あいにく、鼻が虧かけている。その前の、埃のつもつた床に、積重ねてあるのは、紙銭しせんであろう。これは、うす暗い中に、金紙や銀紙が、覚束おぼつかなく光っているので、知れたのである。李は、これだけ、見定めた所で、視線を、廟の中から外へ、転じようとした。すると丁度その途端に、紙銭の積んである中から、人間が一人出て来た。実際は、前からそこに蹲うすくまっていたのが、そ

の時、始めて、うす暗いのに慣れた李の眼に、見えて来たのである。が、彼には、まるで、それが、紙銭の中から、忽然として、姿を現したように思われた。そこで、彼は、いささか、ぎよつとしながら、恐る恐る、見るような、見ないような顔をして、そつとその人間を窺つて見た。

垢じみた道服どうふくを着て、鳥が巢をくいそうな頭をした、見苦しい老人である。（ははあ、乞丐こじきをして歩く道士だな——李はこう思った。）瘠せた膝を、両腕で抱くようにして、その膝の上へ、髯ひげの長い頤あごをのせている。眼は開いているが、どこを見ているのかわからない。やはり、この雨に遇つたと云う事は、道服の肩がぐつしより濡れているので、知れた。

李は、この老人を見た時に、何とか語ことばをかけなければ、ならぬような気がした。一つには、濡ぬれ鼠ねずみになつた老人の姿が、幾分の同情を動かしたからで、また一つには、世故せこがこう云う場合に、こつちから口を切る習慣を、いつかつけてしまったからである。あるいは、また、そのほかに、始めの無気味な心もちを忘れるようとする努力が、少しは加わっていたかも知れない。そこで李が云つた。

「どうも、困つたお天気ですな。」

「さようさ。」老人は、膝の上から、頤こゝろを離して、始めて、李の方を見た。鳥の嘴くちばしのように曲つた、鍵かぎ鼻ばなを、二三度大仰おごにうごめかしながら、眉の間を狭くして、見たのである。

「私のような商売をしている人間には、雨位、人泣かせのものはありません。」

「ははあ、何御商売かな。」

「鼠を使つて、芝居をさせるのです。」

「それはまたお珍しい。」

こんな具合で、二人の間には、少しずつ、会話が、交換されるようになった。その中に、老人も紙銭の中から出て来て、李としよに、入口の石段の上に腰を下したから、今では顔かおかたち貌もも、はつきり見える。形容の枯槁ここうしている事は、さつき見た時の比ではない。李はそれでも、いい話相手を見つけたつもりで、囊ふくろや筒はこを石段の上に置いたまま、対等ことばな語づかいで、いろいろな話をし

た。

道士は、無口な方だと見えて、はかばか 挨拶々しくは返事もしない。

「成程な」とか「さようさ」とか云う度に、齒のない口が、空気を嚙むような、運動をする。根の所で、きたない黄いろになつて
いる髯も、それにつれて上うえ下したへ動く、——それが如何にも、見
すばらしい。

李は、この老道士に比べれば、あらゆる点で、自分の方が、生活上の優者だと考えた。そう云う自覚が、愉快でない事は、勿論ない。が、李は、それと同時に、優者であると云う事が、何となくこの老人に対して済まないような心もちがした。彼は、だんべい 談柄を、生活難に落して、自分の暮しの苦しさを、わざわざ誇張して、

話したのは、完まったく、この濟まないような心もちに、煩わづらわされた結果である。

「まったく、それは泣きたくなるくらいなものですよ。食わずに、一日すごした事だつて、度々あります。この間も、しみじみこう思いました。『己おれは鼠に芝居をさせて、飯めしを食っていると思つている。が、事によるとほんとうは、鼠が己にこんな商売をさせて、食っているのかも知れない。』実際、そんなものですよ。」

李は撫然ぶぜんとして、こんな事さえ云つた。が、道士の無口な事は、前と一向、変りがない。それが、李の神経には、前よりも一層、甚しくなつたように思われた。（先生、己おれの云つた事を、妙にひがんで取つたのだらう。余計な事は云わずに、黙つていればよか

った。——李は、心の中でこう自分を叱った。そうして、そつと横目を使つて、老人の容子ようすを見た。道士は、顔を李と反対の方に向けて、雨にたたかれてゐる廟外の枯柳こりゆうをながめながら、片手で、しきりに髪を搔かいている。顔は見えないが、どうやら李の心もちを見透かして、相手にならずにゐるらしい。そう思うと、多少不快な気がしたが、自分の同情の徹しないと云う不満の方が、それよりも大きいので、今度は話題を、今年の秋の蝗災こうさいへ持つて行つた。この地方の蒙つた惨害の話から農家一般の困窮で、老人の窮状をジャステイファイしてやりたいと思つたのである。

すると、その話の途中で、老道士は、李の方へ、顔をむけた。皺しわの重なり合つた中に、可笑おかしさをこらえているような、筋肉の

緊張がある。

「あなたは私に同情して下さいるらしいが、」こう云つて、老人は堪えきれなくなつたように、声をあげて笑つた。烏が鳴くような、鋭い、しわがれた声で笑つたのである。「私は、金には不自由をしない人間でね、お望みなら、あなたのお暮し位はお助け申しても、よろしい。」

李は、話の腰を折られたまま、呆然^{ぼうぜん}として、ただ、道士の顔を見つめていた。(こいつは、氣違いだ。)——やつとこう云う反省が起つて来たのは、暫くの間瞪^{とうもく}目して、黙っていた後の事である。が、その反省は、すぐにまた老道士の次の話によつて、打壞された。「千^{せん}鑑^{いっ}や二千鑑^{いっ}でよろしければ、今でもさし上げ

よう。実は、私は、ただの人間ではない。」老人は、それから、手短に、自分の経歴を話した。元は、何とか云う市の屠者まちとしやだったが、偶々たまたま、呂祖ろそに遇つて、道を学んだと云うのである。それがすむと、道士は、徐しずかに立つて、廟の中へはいつた。そうして、片手で李をさしまねきながら、片手で、床の上の紙銭をかき集めた。李は五感を失つた人のように、茫然として、廟の中へ這いこんだ。両手を鼠の糞ほこりと埃との多い床の上について、平伏するような形をしながら、首だけ上げて、下から道士の顔を眺めているのである。

道士は、曲つた腰を、苦しそうに、伸ばして、かき集めた紙銭を両手で床からすくい上げた。それから、それを掌てのひらでもみ合せな

がら、忙せわしく足下へ撒きちらし始めた。鏘そう々然そうとして、床に落ちる黄白こうはくの音が、にわかには、廟外の寒雨かんうの声を圧して、起った。——撒かれた紙銭は、手を離れると共に、忽たちまち、無数の金銭や銀銭に、変つたのである。……

李小二は、この雨銭うせんの中に、いつまでも、床に這ったまま、ぼんやり老道士の顔を見上げていた。

下

李小二は、陶朱とうしゆの富を得た。偶たま々また、その仙人に遇つたと云う事を疑う者があれば、彼は、その時、老人に書いて貰つた、四句の

語を出して示すのである。この話を、久しい以前に、何かの本で見た作者は、遺憾ながら、それを、文字通りに記憶していない。

そこで、大意を支那のものを翻訳したらしい日本文で書いて、この話の完りにおわ附して置こうと思う。但し、これは、李小二が、何故、仙にして、乞丐きつがいをして歩くかと云う事を訊ねた、答なのだそうである。

「人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚だ、無聊ぶりようなり。仙人は若しかず、凡人の死苦あるに。」

恐らく、仙人は、人間の生活がなつかしくなつて、わざわざ、苦しい事を、探してあるいたのであろう。

(大正四年七月二十三日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1995（平成7）年10月5日第13刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月6日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

仙人

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>